

日中翻訳——「天声人語」(2014.3.7)

続 三 義

0. 前置き

『朝日新聞』のコラム「天声人語」はいい文章として知られ、朝日新聞中文網では、2012年12月11日から「天声人語」の中国語訳を掲載し始め、中国の読者に「天声人語」を紹介し、その後、繁体字版も付け、台湾など、中国語の繁体字圏の読者にも紹介するようになった。これはとてもよい試みである。しかし、その中国語訳は、これまで筆者が分析・指摘したように、翻訳者自身の日本語の読解力の足りなさからか、時間の関係で中国語訳を吟味する余裕がなかったのか、あるいは、訳者の中国語表現力の不足なのか、中国語表現には一定の問題が存在し、検討しなおすべき箇所が多く存する。これらの問題があったせいか、朝日新聞社は、2017年4月5日を機に中文網版の改訂を行い、それまでの「天声人語」の中国語訳が見られなくなった。ちょっと残念に思う次第である。ここで取り上げているのは、2014年5月9日付けの、2014年3月7日の「天声人語」[「他者とどう折り合うか」]の中国語訳《如何与他人妥协共存》(以下「訳文」とする)である。

翻訳をする際、言葉の意味を理解することが前提である。多くの場合、先人の研究成果——辞書を使えば、基本的な語彙の問題はおおよそ解決できる。しかし、辞書ばかりに頼ってもいけない。本論は、基本的に中国語・日本語、および中日一日中辞書の釈義や説明などを利用し、辞書の相互参照などを通じて、語彙の意味を確認・分析し、これによって「訳文」の足りないところを指摘する。いくつかの語彙の問題を解決した後、文のつながり・文脈の理解と翻訳について論じ、さらに中国語の表現問題についても言及し、最後に、語彙にもかかわるが、動詞述語と目的語との組み合わせ、いわゆる「連語」の問題についても論ずることとする。辞書などで解決できる問題は、辞書の説明で解決し、辞書の説明だけでは解決できない問題は、筆者の独特の分析によって解説する。付録には、原文と「訳文」そして筆者の翻訳案も添える。

1. 語彙問題に関する分析

本章では、「訳文」の表現における語彙の問題を取り上げることとする。語彙の定義もいろいろ

とあろうが、ここでの語彙は、単語、連語、慣用語などを指すものとして、広い意味での語彙とする。

(1) “抱怨一句”と「つぶやく」

記述をしやすくするために、まず「天声人語」の第一段とその「訳文」を下に引用しておく。

世の中にたえて花粉のなかりせば、とつぶやく。列島が黄や赤の花粉情報に染まっていくのを見ると、かゆい目がますますむずがゆい。アレルギーと呼ばれるこの症状、何かを「異物」として排除する免疫の過剰な働きらしい。

抱怨一句，这世上若能绝了花粉（该多好）。看着预报图上列岛逐渐被花粉信息染成黄色、红色，本就干痒的眼睛愈发刺痒起来。被称为过敏的这一症状，似乎是把什么当做“异物”的免疫系统在过度发力。

まずこの段落の中の“抱怨一句”という語を見てみよう。“抱怨一句”は日本語の「つぶやく」の訳語である。“一句”は字面から見れば「一文」の意味で、「つぶやく」の意味からは引き出すことができない。これは中国語に訳すときに動詞“抱怨”だけだと落ち着きが足りないということを補うためにつけたものとして認めることができ、ここでは不問としよう。ここで主に動詞“抱怨”との比較対照をすることとする。

「つぶやく」に関しては、『スーパー大辞林』（電子辞書・三省堂。以下『大辞林』とする。記号、標記などを変更することがある。以下同）では、次のように積義されている。

【呖く】 小声でひとりごとを言う。

これに対して、『日中辞典』（電子辞書・講談社。以下『日中』とする）は次のように訳語を当てている。

嘟囔；嘀咕，唠叨；发牢骚。

この訳語を見る限り、「つぶやく」に対して『日中』は別に“抱怨（一句）”のような訳語を挙げていない。ここでの訳語は前の3つは、いずれも「ぶつぶつ言う」という意味である。ある意味では、最後の“发牢骚”が“抱怨”に近いかもしれない。

それでは、“发牢骚”の意味を見てみよう。『中日大辞典』（第三版・大修館書店。2010年。以下『中日大』とする）では、次のように積義されている。

不平を言う。ぶつぶつ言う。

この意味では、「ぶつぶつ言う」という説明もあるが、「不平を言う」意味の方が強いだろう。それでは、「訳文」の“抱怨”はどうだろう。“抱怨”に関しては、『中日大』では、次のように積義されている。

不満を抱く。怨みを抱く。

この意味では、「不平を言う」「发牢骚」よりも、さらに強い意味になる。これでは、日本語の「つ

ぶやく」からより遠く離れているように思われる。

『大辞林』の積義で分かるように、日本語の「つぶやく」は、別に悪い意味を持ついわゆる「貶義」があるわけではなく、文脈によっては、ちょっとした不平を言うというニュアンスは出るが、全体的には、中性的な意味である。しかし、中国語の“抱怨”は強く、不満を抱くという、より強い「貶義」を帯びている。これでは、作者の意味と違う意味になってしまう。

しかし、中国語の“抱怨”は『中日大』の積義ではけっこう強く感じるが、実際の使用ではただの「不平を言う」という意味になる場合があるように思われる。そういう意味では、「訳文」の表現はあながち間違いとも言えなさそうである。とはいえ、「つぶやく」が基本的に中性的表現であるのに対して、“抱怨”は強い「貶義」があるということから、ここでの訳としては不適切で、やはり「つぶやく」の意味に合った“嘟囔”（ぶつぶつ言う。ひそひそ話す。『中日大』）の方が適切であろう。

(2) “争执”と「けんか」

記述をしやすくするために、「天声人語」の第二段とその「訳文」を下に引用しておく。

いわばけんかである。迷惑だが、花粉も免疫もそれぞれ大切な役目があって、両成敗ともいえない。どうか仲良く、と願いつつ、このほど公開された道徳教材を開くと、「ともだちとなかよく」。低学年用の本にあった

即所谓的“争执”。虽惹麻烦，但花粉也好免疫系统也罢，各身负重任，不该两者皆罚。一面想着愿这两者和平相处，一面翻开近日公布的道德教材，低年级用的课本里有一句“与朋友和睦相处”。

この“争执”は日本語の「けんか」の訳語である。まず、中国語の“争执”の意味を見てみよう。《现代汉语词典》(第六版。2013年。商务印书馆。以下《现汉》とする)では次のように積義されている。

争论中固执己见，不肯相让。

《现汉》の意味は、「論争中、自分の意見を固執し、お互いに譲らない」ということである。これに関して、『中日大』では、次のように積義されている。

①固執して争う。論争する、②論争。意見の相違。

『中日大』の積義は、動詞と名詞の両方からしているが、要するに、中国語の“争执”は、論争して相譲らないという意味であるので、おおよそ日本語の「論争」に近いと考えられる。これに対して、日本語の「けんか」はどうだろう。ある意味では、日本語の「けんか」は日常用語でもあるし、それほど難しい言葉ではない。『大辞林』では「けんか」に関する積義は次のように示されている。

〔②は原義〕①言いあらそったり腕力を用いてあらそったりすること。言いあらそいやなぐり合い。いさかい。②やかましく言い立てること。騒がしいこと。

『大辞林』の②の意味は、原義といって、古い用法である。現代語の中では、使われていない。

現代語の「けんか」、つまり①を『日中』は次のように釈義し、訳語を付けている。

(～する) (口論) 吵嘴；吵架；争吵。(殴りあい) 打架。

これを見ても、「訳文」の「争执」という言葉は出てこない。“争执”には「論争」という意味はあっても、「論争」はあくまでも何かのテーマや議題をめぐって言い争うことであって、「腕力を用いてあらそったり」、「なぐり合い」をしたりはしない。

そして、日本語の「けんか」はあくまでも人間の行いを言っているのであって、『日中』の中国語訳も、全部人間の行為に関する言葉である。

「天声人語」では、この「けんか」という言葉を用いているが、これはあくまでも擬人化の言い方で、ユーモラスに言っている感じである。ここで言っている「けんか」の主体はだれかということ、本文第1段にある、花粉と免疫機能のことである。この二者のけんかである。

上記のように、中国語の「争执」はあくまでも「論争」の意味であるので、花粉と免疫機能はたとえ「取っ組み合い」はできても、口を使った「論争」などはできない。なので、日本語では「けんか」という言葉を使ってもいいが、絶対「論争」という言葉を使うことがない。この「取っ組み合い」は、ほかの言葉で言い換えれば、おそらく「格闘」ということになろう。『広辞苑』(岩波書店・電子版・第四版)では、「格闘」について次のように釈義されている。

組打ちして争うこと。懸命に取り組むこと。とっくみあい。

『広辞苑』の「とっくみあい」の釈義で分かるように、「けんか」は「格闘」と同義語と言えよう。ここの中国語訳は、日本語の「格闘」に対する中国語の“格斗”という言葉を使えばよい。言うまでもなく、「格闘」にしても“格斗”にしても、これも一応、人間の行為を言っているが、この両者とも抽象的な言い方に用いられることがある。「天声人語」では、比喩的に「けんか」という言葉を使っていると考えられる。

(3) “重任”と「大切な役目」

同じ段落の言葉であるが、“重任”は「大切な役目」の訳語である。

中国語の“重任”は、その漢字表記からも日本語の「重任」とほとんど同義であることが分かる。中国語では、“重”の読み方によって、「重要な任務」と「再任」という2つの意味を取ることができる。日本語の「重任」にも、「じゅんにん」と「ちょうにん」という2通りの読み方がある。これは中国語の読み方にも通じるところだが、現在では「じゅうにん」という読み方1つで、「重要な任務」と「再任」という2つの意味を兼ねて表している。『岩波国語辞典』(第六版。以下、『岩波』とする)には「ちょうにん」の見出しはない。それは別として、ここでは言うまでもなく、「重要な任務」という意味である。しかし、「任務」と「役目」の意味は同じかということ、そうではない。

ここでは、『大辞林』におけるこの2語の釈義を見てみよう。

任務

課せられた仕事。果たすべきつとめ。

役目

役として果たさねばならないつとめ。役割。

『大辞林』の説明を見る限り、この2語の説明には、いずれも「つとめ」という言葉がある。両者の違いは、「役目」に関する説明の中の「役割」であろう。『岩波』の説明を見てみよう。

任務

組織やその一員として与えられ（分担し）て、果たさなくてはならない務め。

役目

役として割り振られて受け持つ、つとめ。職責。

ある意味では、『岩波』の説明で、用字こそ違いがあるが、「務め」も「つとめ」も同じ意味と理解してもよさそうである。違うのは、「役目」に関する「職責」の説明である。この2語の『日中』における中国語の訳語を見てみよう。

任務

任务；工作；职责。

役目

职责；责任；任务。

確かに、『日中』の訳語も似たり寄ったりしているようであるが、どちらかといえば、「任務」は「仕事」つまり“工作”の方に重みを置くのに対して、「役目」は「役割」つまり“职责”の方に重点を置くようである。それでも、「役目」に関して重要なのは、『大辞林』と『岩波』の「役として」の説明であろう。「役割」、「職責」という語も重要な意味を担っている。

確かに、「天声人語」はここで、「役目」という言葉を使っているが、「働き」や「機能」、またはずばりと『大辞林』の「役割」という言葉を使っても大して違いはないだろう。「役目」に対する中国語訳は、まだ日中辞書には載っていないようだが、割と新しい言い方に、“担当”という言葉がある（“担当”という言葉自身は別に新しい言葉ではない。ただし、この「役目」にあたる意味項目としては、筆者は新しい意味だと考えている）。ここでは、この語を使いたい。そして、「働き」や「機能」に対しては、“功能”や“作用”という言葉がある。これらの言葉は、ここでの訳語としていずれもより適切だろう。

(4) “兩者皆罰”と「両成敗」

同じ段落にある言葉であるが、“兩者皆罰”は「両成敗」の訳語である。結論から言えば、意味としては、この訳は間違いとも言えなさそうである。しかし、字面から見れば、“兩者皆罰”とは、両者にもとに罰を与えるという意味になる。『大辞林』は「両成敗」を「当事者となった両者をともに罰すること」と説明している。これを見る限り、“兩者皆罰”という訳語もそれなりの理由がある。しかし、「両成敗」はあくまでも熟語で、その字面からは「罰」という意味は読み取れない。もし本当に「罰」ということとなると、これは法律や刑法のことになり、ここでの議論にはふさわしくなくなる。

中国語の熟語・諺に“各打五十大板”という言い方がある。『中日辞典』（電子辞書・講談社。以下『中日』とする）では次のように釈義されている。

原告・被告ともに50回の尻たたきの罰を与える。状況を考慮に入れず、一律に処罰するたとえ。
花粉と免疫機能のそれぞれの役目（状況）を考慮に入れず、一律に処罰するという意味においては、この言葉が、ここにぴったりだろう。

(5) “躊躇”と「立ち止まる」

記述をしやすくするために、「天声人語」の第三段とその「訳文」を下に引用しておく。

いじめ防止が狙いの一つで、来月、全国の小中学生が手にする。共に生きる大切さを教え、命の尊重を説く。異論はない。ただ「日本人としての自覚」「我が国を愛し発展に努める」といった記述に、ふと立ち止まる。食事中に砂粒を嚙（か）んだような感じがする

（新教材的）目的之一是防止欺凌，下月，全国的中小学生将人手一册。教授共生的的重要，讲述尊重生命。笔者并无异议。只是，面对“作为日本人的自觉”、“爱我国家，为发展而努力”的字句，不由躊躇不已。感觉仿佛在就餐时磕到了沙粒。

この“躊躇”は日本語原文の「立ち止まる」の訳語である。この“躊躇”という中国語は、これに対する日本語の漢字語もある。「躊躇」である。意味的には、この二語は同義と考えられる。それでは、まず、「躊躇」の意味を見てみよう。

『大辞林』では、次のように説明されている。

ためらうこと。ぐずぐずすること。

中国語の“躊躇”は“猶豫”とも言い、どれも日本語の「ためらう」、「躊躇」の意味である。『大辞林』の「躊躇」に関する説明の「ぐずぐずする」は中国語では、“磨磨蹭蹭”がこれに当たるだろう。要するに、日本語の「立ち止まる」とは関係のない言葉である。

「立ち止まる」は日常的な言葉で、それほど難しくはない。『日中』では、次のように訳語を与えている。

站住；止步；停下。

要するに、歩いている状態から止まるという状態になること。これは、人の具体的な動作に関する言葉であって、“躊躇”「ためらう」のような人の意識的なことについては言っていない。『日中』の訳語で大体言い尽くされているが、より書き言葉的にすれば、“驻足”や“驻足不前”などの訳し方もあろう。

“驻足”に関しては、『現漢』では、次のように説明されている。

停止脚步。

『中日大』では、次のように釈義されているのである。

立ち止まる。足を止める。

(6) “试问”と「問いかける」

記述をしやすくするために、「天声人語」の第五段とその「訳文」を下に引用しておく。

自分の考えを押しつけるのではなく、相手の立場も考え、耳を傾ける。異質な他者とどう折り合いをつけるのか。沖縄生まれの詩人、山之口獏（ばく）の「存在」という詩は問いかける。
(僕らが僕々言っている／その僕とは、僕なのか)

不要把自己的想法强加于人，也要考虑对方的立场，侧耳倾听。如何与迥异的他人妥协、共存。
沖縄詩人山之口獏的诗作《存在》试问：“我们都在说我、我/那‘我’，可是‘我’？”

日本語の「問いかける」は別にそれほど難しい言葉ではない。単純動詞の「問う」に、「他に向かって働きかける」という意味の動詞「かける」を付け加えたものだが、『岩波』では、次のように釈義されている。

質問をしかける。尋ねる。

これに対して、『日中』では、次のように訳語を与えている。

问。打听。

つまり、非常に意味単純な動詞である。しかし、「訳文」は、“试问”という言葉とその訳に充てている。“试问”を字面から見れば、「試して聞く」（聞いてみる）という意味になる。まず、この文脈では、どうして「試して聞く」という意味合いになろう。ここでは、ただの「聞く」「尋ねる」という意味であろう。

それよりも、中国語の“试问”はただの「試して聞く」という字面の意味にはとどまらず、もっと別の語用的な意味があることである。人に何か質問を「試して聞く」場合、絶対にこの“试问”という言葉を使ってはいけない。『現漢』では、次のように説明している。

试着提出问题（用于质问对方或者表示不同意对方的意见）。

『現漢』の説明でもわかるように、字面から言えば、「試して聞く」という意味である。しかし、

括弧の中の補足“用于质问对方或者表示不同意对方的意见”「相手に詰問したり、または相手の意見に賛同しなかったりする場合に用いられる」がむしろ、この“試問”の重要なポイントである。『中日大』は、次のように釈義し、そして用例を挙げて、その意味を補足している。

試みに尋ねる（が）。[试问没有船怎么过江呢] 考えてもみよ、船がなくてどうして川を渡れよう。

《現漢》の補足説明で分かるように、“試問”の前提は、相手に不信感、反対などの考えを持つことである。『中日大』は、例文の中で「考えてもみよ」という訳を与えている。普通の「問いかける」に当たる訳語としては使えないのである。

2. 文脈における文の表現——“固然”をめぐる

翻訳をする際、一語や一文を単位に翻訳することもあるが、文のつながり、つまり文脈を考えたうえで訳さないと、意味の合った翻訳にならないことが多い。そして、その文のつながりを考える際、原文の作者の強調するところを考慮に入れないと、異なる意味になる場合がある。この節では「訳文」の“固然”の使い方をめぐり、翻訳における文のつながり（文脈）の表現の大切さを述べてみたい。記述をやすくするために、「天声人語」の第四段とその「訳文」を下に引用しておく。

心からの自然な愛はいい。けれど国への愛を国が説くと、天然色の愛にどこか人工的な色がつく。海の向こうの人々にもそれぞれの「我が国」がある。摩擦が繰り返される現実を思う

发自内心的、自然而然的的爱固然好。但若是国家大谈爱国，天然的爱便带上了人工的色彩。大海对岸的人们也有各自的“祖国”。想起摩擦频发的现实。

“固然”は「訳文」のこの段落の最初の文に用いられた言葉である。日本語原文は「心からの自然な愛はいい。」となっていて、意味もそれほど難しくない。直訳すれば、すなわち“出自内心的、自然的愛，好。”つまり「心からの自然な愛は、いい。」ということである。しかし、「訳文」では、ここに“固然”という言葉が入れられている。それでは、この“固然”はどういう意味だろうか。まず《現漢》の説明を見てみよう。

〔連〕①表示承认某个事实，引起下文转折。②表示承认甲事实，也不否认乙事实。

《現漢》の説明は大体「①ある事実を認め、次の文の逆説を引き出す。②甲という事実を認めるが、乙という事実も否定しない。」という意味である。これに関して、『中日』では、次のように説明している。

〔副〕 確かに（…ではあるが）。むしろ（…ではあるが）。

《現漢》では「〔連〕」つまり“连词”「接続詞」としているところを、『中日』では「〔副〕」つまり「副詞」としている。このことについては、ここでは詳しく言及しないことにするが、“固然”が普通2つの文をつなげるのに用いられ、しかも前の文に用いられることは確かである。この問題は、

“固然”は「確かに」、「むろん」というニュアンスを含んでいることである。しかし、“固然”を使った文はそこで打ち切ることはない。前件に対して、次の後件で対照的な事例が挙げられる場合に用いられる。すなわち、“固然”を使った前の文はある判断を出しているが、その判断には保留があり、そして後の文で、前件に対してそれとは異なることを述べ、前件の判断の確実性を弱めたり、損ねたり、または否定したりする。『中日』の「(…ではあるが)」の補足はこのことを如実に反映している。ここの日本語の原文の表現は素直に断定しているのに、“固然”を使った「訳文」は「実は～」というニュアンスを帯びてしまう。したがって、この使い方には問題がある。

読者は、ここの「訳文」もその後に“但是”という逆接を表す接続詞が使われていることに気づくだろう。それは日本語原文の「けれど」という逆接接続詞の訳語である。「天声人語」の作者は、前件の「心からの自然な愛はいい」との判断について、「それもそうだが、しかし、～」などとは言っていない。後続文では、別の角度から「国への愛を国が説くと、天然色の愛にどこか人工的な色がつく」と述べ、愛を説く主体の加入によってその素晴らしい愛の色が損なわれることを説き、前件の「心からの自然な愛はいい」の判断を擁護する形で論述を展開させている。しかし「訳文」では“固然”の使用によって前件のその断定のニュアンスがだいぶ弱められている。「訳文」から読む「天声人語」の作者の気持ちは、「確かに心からの自然な愛はいいけれど～」というようになり、全く作者の想定外の意味になってしまう。

訳者が「心からの自然な愛はいい」の1文はそのまま翻訳すると、上記の筆者の示す翻訳例“出自内心的、自然的愛、好。”のように、いくらかぎこちない中国語文になるのを鑑み、そして次の文とのつながりを考えたうえで“固然”を使ったものと思われる。確かに苦心していると思う。しかし“固然”を使ったことで、元々素直な断定の文があやふやな譲歩の文になり、作者の原意は損なわれることになってしまう。中国語の2文のつながりをスムーズにしようとして工夫をした翻訳ではあるが、意味を損ねてしまったことになり、これでは蛇足としか言いようがない。文のつながり・文脈における表現の難しさが分かる。

中国語の形容詞は単独で用いられる際、いろいろな制限があることは周知のとおりである。上記の“出自内心的、自然的愛、好。”の訳例もその反映である。「天声人語」では「心からの自然な愛はいい」としか言っていないが、ここの「いい」は「何よりも」という言葉で修飾しても何ら違和感がないだろう。中国語の形容詞が単独で用いられる際、その前に往々にして程度副詞を添えることがある。こういう意味で、筆者は、次のような訳例を考えたい。

发自内心的、自然而然的愛最好。

3. 述語欠如、主述の組み合わせの問題点

以上、主に語彙を中心に「訳文」の中国語表現の問題について述べてきた。翻訳の際、単語、連語、

そして文などの意味をよく考えることは言うまでもないが、単語、連語の翻訳もさることながら、例えば文を翻訳する際、その訳された中国語の文はどうなっているのか、その表現と原文との違いはないか、確認しなければならない。特に中国語の文法構造になっているかどうか、考えなければならない。この節では、「天声人語」の最初の段落の最後の1文の「訳文」を考えてみたい。その1文の原文と「訳文」を再録しておく。

アレルギーと呼ばれるこの症状、何かを「異物」として排除する免疫の過剰な働きらしい
被称为过敏的这一症状，似乎是把什么当做“异物”的免疫系统在过度发力。

ここで問題にしたいのは、まずこの文の述語部分の“似乎是把什么当做‘异物’的免疫系统在过度发力”である。この中国語を日本語に戻すと、一応次のようになろう。

何かを「異物」とする免疫システムが余分に力を出しているところらしい

ある意味では、この日本語だけを見ても、「訳文」の問題点が見えるだろう。つまり、原文では、「何かを『異物』として排除する」となっているが、「訳文」ではその「排除する」という大事な述語動詞の部分が落ちている。人間の体の「免疫」（機能）は、ただ「何かを異物とする」ことではなく、「何かを異物として排除する」ことこそが人間の体の「免疫」（機能）なのである。文の論理関係からでも、この「訳文」の問題点が見える。

それから、この「訳文」全体は、主語と述語の関係上にもちょっと問題がある。日本語の原文は「アレルギーと呼ばれるこの症状、～過剰な働き」という構造で、つまり主語は「症状」、述語は「過剰な働き（である）」で、これでは問題はない。しかし上記の日本語に戻した「訳文」の意味を見れば、中国語の主語の“症状”に対して、述語は“免疫系统在过度发力”「免疫システムが余分に力を出しているところ」となっていて、これではちょっと意味がなされない。原文は主語の「症状」について、述語でそれは「どういうもの（による）か」と述べている。しかし「訳文」は、主語の「症状」について、述語で「免疫システムが余分に力を出しているところ」という動的な表現で対応している。さらに中国語の“发力”は「力を出す」という意味なので、この表現にも問題がある。この文の主語とその後半の中国語訳は、おそらく次のようになるだろう。

～症状，是人体免疫功能在排斥某种“异物”时的过度反应（的结果）。

4. 述語と目的語の組み合わせ

3では、主語と述語との呼応関係について述べた。この節では述語動詞と目的語の組み合わせについて述べる。この問題に関しては、これまでの筆者の関係論述のなかでは大体「連語」の問題として取り扱われている。「天声人語」の最後の段落の最初の文とその「訳文」を引用しておく。

こちこちに固まった自意識に尋ねても、答えは〈くどくなるだけである〉。

即使追问已僵硬顽固的自我意识，回答也“只不过变得冗长”。

日本語と中国語の構造は、ごく当たり前のことを言えば、日本語はSOP（Sは主語、Oは目的語、Pは述語）であるのに対して、中国語はSPOである。ここの例でいえば、日本語は「(こちこちに固まった) 自意識に尋ね」で、中国語は“追问(已僵硬顽固的) 自我意识”となる。むろん日本語の「自意識に尋ね」の「自意識に」は目的語かどうか、異論があろう。しかし中国語の“追问～自我意识”の中の“自我意识”は動詞の“追问”の目的語“宾语”であることには異論がないだろう。ここでは中国語から議論を進めたい。

中国語の動詞と目的語との組み合わせは、直接目的語と間接目的語がある。“给他”「彼に与える」の場合は、動詞と間接目的語との組み合わせで、“给书”「本を与える」は動詞と直接目的語との組み合わせになる。この場合、受け手としての“他”は人間で、授受の対象者(相手)になるが、“书”は物なので受け手にならず、授受の対象物となる。これに対して、ここの問題の例ではもし“追问他”なら、“他”は人間で、質問の受け手になるが、“自我意识”となると、これは人間ではないので、普通は質問の受け手とは考えにくく、質問の内容として取られるだろう。そういう意味で、この「訳文」は少なくとも誤解を招くような訳し方をしているのである。

授受関係を表す“给”と、言語行為の“问”はいずれも直接目的語と間接目的語を持てる動詞の一群であるが、使い方にはやはり違いがある。“问”と目的語との組み合わせでは、例えば、普通“问他一个问题”「彼に一つの問題を聞く」は、動詞と間接目的語そして直接目的語との組み合わせであるが、動作の相手・受け手を取り立てる際、その間接目的語が介詞“向”によって動詞の前に繰り出され、“向他问一个问题”という構造になる。したがって、質問の対象か内容かの紛らわしさを避けたければ、間接目的語を介詞で動詞の前に繰り出し、“如果是向顽固僵化的自我意识询问”とすれば、問題がなくなる。

5. 結び

「天声人語」(2014.3.7)の中国語訳の問題について述べてきた。この「訳文」に関しては、このほかにもいくつかの問題が残る。例えば、「折り合う」は“妥协共存”と訳されているが、“妥协”「妥协」という消極的な意味よりも“协调”「協調」という語を用いた方がよかろう。「かゆい目がますますむずがゆい」に対して、“干痒的眼睛愈发刺痒起来”と訳されているが、“干痒”と“刺痒”の中国語における違いは必ずしもそれほど明確でないかもしれない。それから、「食事中に」を“在就餐时”と訳されているが、ここの“在”はある意味では余分である。そして“就餐”は「食事」には当たるとは当たるが、《现汉》では“到供应饭食的方去吃饭”「食事を提供するところへ食べに行く」と説明されているように、「食事に行く」という意味合いが強いので、“就餐”ではなく“吃饭”「ご飯を食べる」だけで十分だろう。

皆様のご参考になれば幸いに思う次第である。

参考文献

- 続三義 [2000] 日译汉教学小议——从教学实践谈起『荒屋勸教授古希記念中国語論集』白帝社 2000.3
- 続三義 [2000] 日汉翻译中的宏观把握《日语研究》第1辑 商务印书馆（日语研究编委会）2003.3
- 続三義 [2004] 从日译汉角度看日语汉字及汉字词语的认知与表达《政大日本研究》创刊号 台湾政治大学 2004.1
- 続三義 [2004] 日汉翻译中时间的认知与表达《日语研究》第2辑 商务印书馆（日语研究编委会）2004.9
- 続三義 [2007] 日译汉时的视角和文脉《日语研究》第5辑 商务印书馆 2007.12
- 続三義 [2012] 日中翻译——《天声人語》（2012.7.29）の汉语译文分析『アジア文化研究所研究年報』2012年(47) 2013.2
- 続三義 [2015a] 日汉翻译——《天声人語》（2013.5.29）の汉语译文分析『アジア文化研究所研究年報』2014(49) 2015.2
- 続三義 [2015b] 日汉翻译——以「天声人語」（2009.02.05）为例『東洋大学・経済論集』41(1) 2015.12
-
- 続三義 [2010] 「日中逐次通訳について——通訳の試験問題から」『アジア文化研究所研究年報』2009 (44) 2010.2
- 続三義 [2013] 「日中翻訳——『天声人語』（2012.7.11）の中国語訳を分析する」『日中言語対照研究論集』白帝社（第15）2013.5
- 続三義 [2014] 「日中翻訳について——『天声人語』（2012.6.27）の翻訳例から」『アジア文化研究所研究年報』2013(48) 2014.2
- 続三義 [2015] 「日中翻訳について——『天声人語』（2013.1.14）の中国語訳から」『日本語教育における日中対照研究・漢字教育研究』駿河台出版 2015.4
- 続三義 [2017A] 「日中翻訳の心得——『天声人語』の中国語訳を例に」『中国言語文化学研究』（第6号）2017.3
- 続三義 [2017B] 「日中翻訳——『天声人語』（2013.3.10）について」『高橋弥守彦教授古希記念論文集』2017.3
- 続三義 [2017C] 「日中翻訳における文脈——『天声人語』の中国語訳から」『鈴木泰先生古希記念論文集』2017.3
- 関係辞書類は省略。

付録1 「天声人語」(2014.3.7) とその「訳文」

他者とどう折り合うか	如何与他人妥协共存
<p>世の中にたえて花粉のなかりせば、とつぶやく。列島が黄や赤の花粉情報に染まっていくのを見ると、かゆい目がますますむずがゆい。アレルギーと呼ばれるこの症状、何かを「異物」として排除する免疫の過剰な働きらしい</p> <p>▼いわばけんかである。迷惑だが、花粉も免疫もそれぞれ大切な役目があって、両成敗ともいえない。どうか仲良く、と願いつつ、このほど公開された道德教材を開くと、「ともだちとなかよく」。低学年用の本にあった</p> <p>▼いじめ防止が狙いの一つで、来月、全国の小中学生が手にする。共に生きる大切さを教え、命の尊重を説く。異論はない。ただ「日本人としての自覚」「我が国を愛し発展に努める」といった記述に、ふと立ち止まる。食事中に砂粒を嚙(か)んだような感じがする</p> <p>▼心からの自然な愛はいい。けれど国への愛を国が説くと、天然色の愛にどこか人工的な色がつく。海の向こうの人々にもそれぞれの「我が国」がある。摩擦が繰り返される現実を思う</p> <p>▼自分の考えを押しつけるのではなく、相手の立場も考え、耳を傾ける。異質な他者とどう折り合いをつけるのか。沖縄生まれの詩人、山之口貌(ぼく)の「存在」という詩は問いかける。(僕らが僕々言っている／その僕とは、僕なのか)</p> <p>▼こちこちに固まった自意識に尋ねても、答えはくどくなるだけである)。だから、もう一回り(社会のあたりを廻(ま)わって来い)と。ときに「異物」になっても、一回り。社会のふところの広さを信じ、もう一回り。</p> <p>单词学习</p> <p>1 たえて：后接否定。表示强调。完全(不)、丝毫(不)</p> <p>2 なかりせば：(古典语法)形容词なし的连用形なかり+过去助动词きの未然形せ+接续助词は。意为もしなかったならば、若是没有……的话。</p> <p>3 両成敗(りょうせいばい)：双方同受惩罚。</p>	<p>抱怨一句，这世上若能绝了花粉(该多好)。看着预报图上列岛逐渐被花粉信息染成黄色、红色，本就干痒的眼睛愈发刺痒起来。被称为过敏的这一症状，似乎是把什么当做“异物”的免疫系统在过度发力。</p> <p>即所谓的“争执”。虽惹麻烦，但花粉也好免疫系统也罢，各身负重任，不该两者皆罚。一面想着愿这两者和平相处，一面翻开近日公布的道德教材，低年级用的课本里有一句“与朋友和睦相处”。</p> <p>(新教材的)目的之一是防止欺凌，下月，全国的中小学生将人手一册。教授共生的重要，讲述尊重生命。笔者并无异议。只是，面对“作为日本人的自觉”、“爱我国家，为发展而努力”的字句，不由踌躇不已。感觉仿佛在就餐时碰到了沙粒。</p> <p>发自内心、自然而然的爱固然好。但若是国家大谈爱国，天然的爱便带上了人工的色彩。大海对岸的人们也有各自的“祖国”。想起摩擦频发的现实。</p> <p>不要把自己的想法强加于人，也要考虑对方的立场，侧耳倾听。如何与迥异的他人妥协、共存。冲绳诗人山之口貌的诗作《存在》试问：“我们都在说我、我/那‘我’，可是‘我’？”</p> <p>即使追问已僵硬顽固的自我意识，回答也“只不过变得冗长”。所以说，再走一遭，“到社会上走去一遭”。即使偶尔成了“异物”，也要走去一遭。相信社会的广阔胸怀，再走一遭</p> <p style="text-align: right;">2014年5月9日</p>

如何与他人协调共存

看着预报图上列岛逐渐被表示花粉信息的颜色染成黄色、红色，原本就痒痒的眼睛愈发刺痒起来。我不禁嘟囔了一句，这世上若能绝了花粉（该多好）。被称为过敏的这一症状，据说是人体免疫功能在排斥某种“异物”时的过度反应。

说起来，这就是“格斗”。虽令人讨厌，但花粉也好免疫系统也罢，各有其重要的担当，不能各打五十大板。笔者打心底希望两者能够和平相处，而在翻开近日公开发行的道德教材时，看到低年级用的课本里有“与朋友和睦相处”一个章节。

其目的之一乃是为了防止霸凌。下个月，全国中小学生将人手一册。教授共生的重要性，讲述如何尊重生命。笔者并无异议。只是，当面对“作为日本人的自觉”、“爱我国家，为之发展而努力”的字句时，不由得脚步凝固。就像吃饭时嚼到了沙粒。

发自内心的、自然而然的爱最好。而如果由国家来谈爱国，天然的爱便带上人工雕琢的色彩。大海对岸的人们也有各自的“祖国”。使人不禁想到摩擦频发的现实。

不是把自己的想法强加于人，而是同时也考虑对方的立场，倾听对方的声音。如何与迥异的他人协调共存？生于冲绳的诗人山之口獏的诗作《存在》如此问道：“我们都在说我、我/那‘我’，可是‘我’？”如果是向顽固僵化的自我意识质疑，那么回答也“只会变得啰嗦冗长而已”。因此，应该再“到社会上去走一趟”。有时，即便变成“异物”，也去走一趟。坚信社会的广阔胸襟，再去走一趟。

摘要

本文对朝日新闻中文网上《天声人语》(2014.3.7)的汉语“译文”《如何与他人妥协共存》中的有关汉语表达进行了分析。首先对“抱怨一句”等6个词语的问题进行了分析；其次，通过对译文中所使用的“固然”一词的分析，对如何正确表述相互连接的两个句子、即上下文关系的问题进行了论述；再次，通过对“似乎是把什么当做‘异物’的免疫系统在过度发力”的分析，论述了“译文”貌似正确，但实际表达有误的问题；最后，通过对“追问已僵硬顽固的自我意识”这一动宾搭配中宾语所扮演的角色问题进行论述，指出应当调整句式，以使读者不至对动词与直接宾语、间接宾语的搭配产生误解。